発達障害幼児の集団療育*

——その序説——

村上英治　後藤秀爾[1)]　江口昇勇[2)]

以下二つの報告「発達障害幼児の集団療育（その1）——かかわりスケールにもとづく発達のとらえ——」，「発達障害幼児の集団療育（その2）——2者関係の確立を基盤としての集団志向へ——」，その両者の「まえがき」にあたるものとして，ここでは，私どもが昭和46年以降，今日まで5年間にわたって，名古屋大学教育学部臨床心理相談室で継続してきた療育実践の沿革と，そこで意図し，志向してきた療育理念，すなわち療育に際しての基本的姿勢とを改めてかえりみた上で，特にこの昭和50年度，5たび多くの仲間と共にインテンシブにおしすすめてきた，発達障害幼児に対する母子通所形態集団療育の実践を総括していく上での，若干の視点を提起しておきたいと考える。

通常の論文の形態と違って，この種の論述を独立した「その序説」として，特に稿をおこしたのには，それなりの理由がある。実際，具体的に昭和50年度に行ってきた私どもの集団療育の実態からして，それらの視点を総括し，一つの報告の中にもりこんでいく上には，かなりの無理があるように思われた。すなわち，対象児およびそれを担当する療育者の側の条件から，具体的な実践にあたって，二つの療育グループを構成するという形式を取らざるを得なかったし，そしてまたそれに伴ってそれぞれのグループで1年間の実践を継続していく上での重点のおき方からしても，たとえ究極に志向する目標は同じであっても，当面のねらい，またこの段階での総括となると，かなり異なった面の生ずるのも無理ないことであった。その意味で，今年度の二つのグループの療育実践のまとめは，それぞれ別々に検討され考察されるべきであるとの結論を得て，以下二つの報告にまとめられたのである。

しかしながら，きわめて当然のこととして今年度の実践も，それまで4年間，その折にふれ，その時の療育者の手によって，すでに一部報告されたまとめからも明らかにされてきた，基本となる療育理念に一貫して支えられるものである限り，それぞれ共通する部分も決して少なくない。二つの報告の冒頭に，「まえがき」として本実践における問題の所在を提起しようとする限り，当然重複するであろう叙述を，「その序説」として共通に抽出し，あえて二つの本論に先立ち，稿を改めてここで提起しようとする所以である。

---

* 本研究の概要については東海心理学会第25回大会（1976）に報告されたが，こうしてまとめられるにあたっては，以下二つの論文に名を掲げた，50年度の療育実践における療育者のみならず，昭和46年以降5年にわたる実践に参加した仲間の協力を得た。改めてここで氏名はあげないが，それらの方々に深謝すると共に，特に昭和47年度の療育に際しては，東海学術奨励会からの研究助成を得たことを付記して，ここにまた厚く謝意を表しておきたい。

1）名古屋大学大学院教育学研究科博士課程（後期課程）
2）名古屋大学大学院教育学研究科博士課程（前期課程）

I　従来行なってきた療育の沿革とそこでめざしたもの

I－1　療育の沿革

名古屋大学教育学部臨床心理相談室では，臨床心理学を専攻しようとする学部学生，大学院生，研究生の研修の場としても，外来臨床の形で，さまざまの障害をもった児童，幼児に対する臨床相談を，約10年前，東山キャンパスに研究室が移転した頃から積極的に続けてきた。特に昭和46年４月，通称臨床棟とよばれる教育心理学特殊実験室の竣工以来，従来手狭であった，遊戯療法室，行動分析室，面接室の拡充にともなって一段と活発に，この種の臨床実践が，母子通所形態を原則として行われてきた。

来所する子どもの数も増え，その子どもひとりびとりのかかえる問題自体も多様化してきたのと相応じて，次第に今日関心をよびおこしている重度の心身障害児の問題にも当面させられることが多くなってきた。この種の障害をになった子どもたちに対しての療育をすすめる際にも，この臨床棟では以上の状況からして，従来どちらかといえば１対１の個別的遊戯療法状況が中心となっていたが，この種の障害児にとって，むしろ何よりも必要と考えられる人と人との交流，つながりをとおしての発達を期待するための，集団療育の場が提供されることの必要性は夙に指摘されていたところである。これまでとちがって，かなりのゆとりあるスペースをもった臨床棟の完成を一つの契機として，これらの機運に拍車がかけられ，従来から療育継続中の発達遅滞児を集団としてまとめ，さらに数名の新しい子どもたちをも加えて，実際にこの種の集団形式の療育をもつようになったのが，その年５月からのことである。

具体的な療育のスケジュールとしては，毎週１回，食事介助をはさんで，約３時間にわたり，集団としての子どもに，集団としての療育者がかかわるといった集団療育，そして当然それは母子通所を伴うものであったが，その種の形態の療育をそれ以来今日まで５年間堅持してきた。大学という研修機関であるが故に，療育担当者の側には，どうしても年度ごとに異動があるのは，やむを得ないことであったし，それに応じて療育の対象となる子どもの数も，また障害の度合も異なってはきたが，昭和46年度以降、昭和49年度までの４年間は，大体毎年４人から８人まで，その障害も自閉傾向の強いものを含め，ほとんど重度の精神発達遅滞を中心として合計では20名を越す子どもたちに，ある子どもは１年限り，ある子どもは数年の継続という形で療育をすすめてきたというのが実状である。また療育の形式という点では，最初の２年間は，集団という場は設定しても，原則としてひとりの子どもをひとりの療育者が担当するといった１対１の療育体制を中核にして，そこでの個別的なかかわりを深めることをねらいとしていたが，この形態に終始する限り，たとえ物理的には集団の場が得られたとしても，結果的には，個別療育を集合的場面で行なっているというのにとどまって，真の意味での集団療育としての機能は生かされず，担当者も他の子どもにはなかなか手がまわりきらないし，子ども同志の交流といった面からは，これまたきわめて遠い状況でしかなかったことについての反省がもたれ，その後，時には担当の子どもをあらかじめまったく設定しなかったり，始めからどこまでも集団としての子どもに対する，集団としての療育者といった流動的な対応体制を試行してみたりなど，とりくみの方式でさまざまの模索を試みながら今日に至っている。なお，母子通所といった形式をとる限り，母親に対しては時間を定めて，約１時間の集団面接を療育グループのひとりが担当し，母親自身の障害児をもっての構え，意識の変革に資さしめようと出来うる限り努めてきたし，その面接にもとづく母親集団への接近をも意図してきたが，今回の報告ではこれらについてはふれないことを，ここで断っておきたい。

Ⅰ－2　療育の理念

この療育をすすめるにあたって私どもが堅持してきた基本的姿勢は，すでに昭和46年度の療育を終えるにあたって，その年度の実践の概要をまとめた沼尾（1972）によって，次の三つの命題として明確に提起されている。

A）子どもはどのように障害が重かろうとも，ひとりの人間として生き生きと豊かに発達しつづけていく存在である。

B）子どもは常にその場で関係をもつ「誰か」との心の交流を展開させながら発達していく存在である。

C）子どもは単なる受動的存在ではなく，主体的，能動的に活動することを志向する存在である。

これら三つの命題は，その後ずっと今日に至るまで，こうした集団療育を継承していった私どもにとっての基調としてきた療育理念である。どのように障害が重かろうとも，また発達の道すじの中でいろいろな形での歪みをうけていようとも，彼らはまちがいなく，彼らなりの発達をとげていく。たとえ発達の速度は遅々たるものであっても，彼らを「発達する可能態」としてとらえる視点が，彼らを支え，彼らを励ます，彼らの周囲にある人たちに確信として根ざしていく限り，こうした“ひと”とのかかわりの中で，目をみはるばかりにこの子どもたちも成長し発達をとげていくことに間違いはない。

村上ら（1970，1971，1973，1974a，1974b，1975）の人間学的接近を標榜した一連の研究報告は，愛知県心身障害者コロニーにおける教育研究実習での，重度の心身障害児とかかわりつづけた体験記録であるが，心身障害児に対する人間存在の意義を訴いあげ，その発達の可能性への限りない期待を，その障害児ととりくむ“ひと”とのかかわりの内に求めようとする視点においては，ここでの療育の基本的姿勢とまったく軌を一にするものといってよい。たしかに子どもは“ひと”とのかかわりを通してのみ人間として発達する。しかもそれは　i）そのかかわりの深まりと拡がりという次元で展開すること　ii）そしてそれらの発達はただ子どもの側のみの問題でなく，それとかかわる療育者自身の発達，さらにその相互の成長として期待されること，　iii）それが常に内側からの共感的理解によってのみ成り立つものであることなどの視点が，たとえ5日の取り組みであるにせよ，これまでのその一連の研究で強調されたところである。私どものここで報告するところの取り組みは，今度はたとえ週1回の療育場面であるにしろ，少なくとも1年間を単位として，あるいはそれ以上長期にわたっての継続的，縦断的な療育活動である。こうした長期にわたる療育的かかわりの中で，コロニーにおける体験の視点がより豊かにたしかめられるものではないか，さらにまた，それが集団療育という場である限り，「誰とでも」といった関係の広がりを期待しうるものではないか，この実践で意図した理念はさらにここにもある。

47年度，48年度両年にわたってこの療育の中心となってきた後藤（かをり）は，48年度の療育を総括してのまとめ（1975）の中で，重度精神発達遅滞児の療育目標として“自己のかかわる世界の構造の変化”という視点をもつことの意義を強調し，その妥当性について若干の考察を行なっている。これまた当然ながら，以上の流れを継承し，さらにこれを明確化しようとする試みにほかならない。

未分化から分化へ，受動から能動へ，さらにかかわりの深化と拡大へ，といった視点が，これら障害児たちの，人間としての発達をより一段とうながすものであり，さらに集団状況へと組み込まれていく過程をあとづけていくものであるとの，これらの模索を，探求を，第5年次にあたる昭和50年度，より明確に，おしすすめていきたいとの願いが，以下連なる二つの報告における共通の問題の所在となる。

Ⅱ　昭和50年度における療育の実態とそこでめざしたもの

この年，発達障害幼児のこうした集団療育でめざすところの基本的理念に関心を寄せ，実践活動へ参画することによって積極的にこの種の体験を求めようとした仲間がこれまでになく数多かったことが，従来までの４年間の実践の状況とは違って，新しい療育体制を構成せざるを得ない状況に立ちいたらせたことになる。個人的な事情でどうしても年次の途中，このグループから離れていかざるを得なかった仲間もあれば，またこのグループでの療育を一段と展開させていくべく，特に要請されて新しく後から参加した仲間もあって，結局私どもをはじめ計13名の療育者がこの年の実践に関与したことになる。個人的なひとりびとりのかかわりによる発達をさらにこえて，子どもたちの広い意味での外界とのつながり，特に集団としての動きの形成を，この発達遅滞の子どもたちに強く期待したいとの観点は，それが究極の目標であるだけに，必然的にこの13名にも及ぶ療育者でもって一つのグループを形成するということでは，日常の療育実践とはなり得ないことは明らかであった。その故にこの療育を行うようになって以来，この年初めて火曜，水曜２つの療育グループが構成されたのである。火曜日の実践はＭＲＴグループと，水曜日に行なう実践はＭＲＷグループと，以下通称でよばれることになった。それぞれ６～７名の療育者グループが，これまた多少の出入りはあったけれど，５～６名の子どもたちと，集団場面をあくまで念頭におきながら取り組みをつづけてきたのがこの１年の実践である。

もともと従来の沿革をうけつぎ，その基本的理念に立つ療育実践である限り，基調となる療育目標自体には変るものはない。しかし以上のように，やはり療育者が異なり，それらが取り組む子どもたちの障害の度合や質も異なれば，おのずと療育の具体的様相も，したがってまた異なってくるのはある意味で当然であろう。“ひと”と“ひと”，“集団”と“集団”とのかかわりは，あくまで独自的，一回的のものにほかならないが故にである。かくして今１年間の療育をおえ，この年度の総括を行なおうとする段階になって，やはりまとめの視点も火曜，水曜両グループそれぞれに異なるものが生じてきた。すなわちこの１年間，30数回にわたる療育実践の時系列的な流れの中で，もちろん基本的理念に即して，“ひと”と“ひと”とのかかわりを中心としての世界のひろがりを志向するものであるにしろ，その子どもたちの発達をとらえていく際に，やはり比較的対象となる子どもひとりびとりに即してのかかわりの展開という視点を強調することが，グループの１年の療育をまとめていく上で有効，かつ有意義であると思われた場合と，一方，その集団に属する個々の子どもひとりびとりが，単なる主たる療育者との２者関係の枠のみにとどまらず，その関係を確立した上で，それを基盤として，ひろくそれ以外の他者を意識しての，いわゆる集団の名にふさわしい形でのまとまりへとふみこんでいく様相を強調することが，まとめの視点として重要である場合と，具体的にはこうした二つの側面からの総括のありかたが生まれてきたということになる。ＭＲＷグループのまとめが，その前者の方向をとり，ＭＲＴグループのあとづけは，後者を志向した。したがって以下，報告（その１）はＭＲＷグループによる「かかわりスケールにもとづく発達のとらえ」といった線に即して，報告（その２）はＭＲＴグループによる「２者関係の確立を基盤としての集団志向へ」といった副題にそって，それぞれまずこの療育に参加した両グループの子どもひとりびとりの１年間のそれなりの成長，発達のあとづけがこころみられ，その上でさらにそれらそれぞれのグループを全体として考察するためのまとめが意図された。

具体的に子どもひとりびとりの名前はすべて仮の名で以下記述されているが，ごく低年令の数名をのぞいてこれらの子どもたちの大部分が，この年度のおわり，すなわち昭和51年３月には何らかの形で，養護学校，特殊学級，通園施設，あるいは一

般の保育園など，より公的な施設の中での療育をうける状況が得られるようになったことをこの療育にたずさわってきたものとして心からよろこびたい。それらの公共の場における集団の一員としてのより豊かな成長を，発達を，期待できるが故にである。それと同時に，彼らとかかわったこの1年間，ここ数年継続してこうした療育を経験しつづけてきたものにとってはもとより，たとえわずかこの1年だけであっても，こうした療育実践を体験してきた療育者自身が，この子どもたちとかかわりつづけた体験の中から，障害児の生きざまをとおして，人間存在の真の意義を学びとってきたとの実感を抱いていることを付記して，障害児とのこの種の集団療育の意義の大きさをここで，ふたたび強調しておきたいと考える。

文　　献

後藤かをり　1975　重度精神発達遅滞児の治療教育に関する研究――療育目標としての自己のかかわる世界の構造の発達――昭和49年度名古屋大学大学院教育学研究科修士論文（未刊）

村上英治・蔭山英順ほか　1970　重度精神薄弱児への人間学的接近（序報）――かかわりの体験をとおして――名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）　**17**　1～19

村上英治　1971　重度精神薄弱児への人間学的接近（第2報）――"私の内なる障害児"への志向――名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）　**18**　1～15

村上英治・後藤かをり　1973　重度精神薄弱児への人間学的接近（第3報）――ある盲精神薄弱者との出会い――名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）　**20**　51～60

村上英治・後藤秀爾　1974a　重度精神薄弱児への人間学的接近（第4報）――三たびケイ子と――名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）　**21**　3～23

村上英治・赤塚大樹ほか　1974b　重度精神薄弱児への人間学的接近（第5報）――発達するということ――名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）　**21**　25～39

村上英治　1975　重度心身障害児者への人間学的接近（第6報）――「ことば」ある子と――名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）　**22**　25～38

沼尾孝平　1972　重度精神薄弱幼児の発達過程の分析――6ケ月間の臨床的働きかけを通して――昭和46年度名古屋大学大学院教育学研究科修士論文（未刊）